

震災後の三陸秋サケの加工流通状況

加工原料不足が判明

津波による流通機能の喪失

今回の大震災で三陸沿岸の水産物の冷凍冷蔵・加工流通機能のほとんどが破壊されてから一年が過ぎましたが、被災地はなお復興途上にあります。

秋サケの加工流通は三陸地域の重要な水産基幹産業で、ふ化放流事業、定置網漁業、加工流通業（冷蔵・冷蔵機能も含む）の連携によって成り立っています。水揚げされた秋サケは、加工と流通の機能によって消費市場に届けられ、産業として完結します。しかし、2011年の秋サケ流通状況は震災の影響で例年と大きく異なることが懸念されました。そこで秋サケの水揚げが増えてくる10月上旬から、宮城県石巻市から岩手県久慈市の沿岸域で、秋サケの加



図. 調査地点

工流通状況について関係者への聞き取りを行いました(図)。

復活に合わせた加工場の復旧

秋サケ産業については、回帰してくる秋サケに希望を寄せて、復旧のための資金を早期に調達できた会社や、在庫あるいは加工資機材の流失を運良く免れた会社は比較的早く復旧を進めることができていました(写真1)。会社が地元深く根付いていたことも早期復旧の動機になっていたようでした。一方、石巻市や気仙沼市、陸前高田市の地盤沈下の規模が大きかったところでは、復

旧の妨げになっていました。

秋サケ漁業の前期(10月)では、水揚げに期待する声が大きく、水産関係者は秋サケ加工流通の復旧が現地の水産業の復興につながるという強い意識を持っていました。

盛期(11月)に入り、加工場は早期に復旧したものの水揚げが予想より少なく価格は高かったため、原料の確保に大変苦労していました。後期(12月)では、来遊時期の遅れによって水揚げが続くのではとの期待がありました。但し、本年度は従来の2分の1から3分の1の処理量に終わる見通しとなり、原料不足が明らかになりました。

これからが復活の正念場

三陸地域の秋サケ処理能力を聞き



写真1. 再建工事中の秋サケ加工場(陸前高田市)



写真2. 水揚げされた秋サケ(志津川魚市場)

取りによって見積もったところ、震災の影響で2万トンを下回りましたが、実際の水揚げ量は1万トンにも達せず原料不足が深刻であることが明らかになりました。聞き取り調査などを引き続き行い、調査結果については、現地推進本部を通じて情報を提供するなど、今後も復興に貢献していきたいと考えています。

復旧最中で原料買い付けに奔走していた時期にも関わらず、調査に協力いただいた皆さまには改めて感謝します。